

### 第3回 信濃川水系学識者会議 全体調整会議 議事要旨

開催日時：平成24年3月13日（火）13：30～16：00

場 所：チサンホテル&コンファレンスセンター新潟 4F「越後」

議事次第：1. 開会

2. 挨拶

3. 出席者の紹介

4. 議事

①信濃川水系河川整備計画策定に関するこれまでの取り組み状況について

②国土交通省所管公共事業における政策目標評価型事業評価の導入について

③河川整備計画の目標について

④その他

5. 閉会

#### 【各委員の主な発言】

#### ■洪水等による災害の発生の防止又は軽減に関する目標について

（整備目標について）

- 上中下流の治水安全度の目標は、災害マップ作りなどに役立つことから示して欲しい。

#### 【委員】

（事務局）

戦後最大洪水規模を目標とし、これは上流千曲川では約25年に1回、中流では約40年に1回、信濃川下流では約90年に1回の規模となる。

- 河川整備目標の標語にある「概ね戦後最大規模の洪水」の意味を分かるようにして欲しい。【委員】

- 河川整備計画策定フローでは、各段階でどのような項目が記載され、また策定スケジュールはどのような予定か。【委員】

（事務局）

骨子では、治水・利水・環境の目標及びその達成に必要な具体的な整備メニューを記載する他、代替案比較を提示し各部会にお諮りする。次の原案では、より精度を高めたものをお示しする予定。

策定期間については、学識者の意見を聞きながら策定を進めることから、あらかじめ提示することは差し控えたい。なお、事務局としては年度内の策定を目途として考えている。

（河川整備の進め方について）

- 平成23年7月豪雨では、平成16年7月豪雨を受けた治水対策により人口密集地区の被

害を避けることができた」と評価している。一方で、支川からの流入により本川に負荷がかかり計画高水位を越えて流下したことから、これを回避する手立てが必要である。【委員】

- 上下流バランスに配慮した整備計画では、大河津分水路に上流からの洪水の全量を流すことが前提の治水計画から、大河津分水路の開削が一番の優先事項だと考える。【委員】
- 長野県の方々のご意見を頂く機会があり、そこでは立ヶ花等の狭窄部を早く開削して欲しいという意見が出ているが、下流の負荷が増えることに今後どのような考えで進めていくのか示すべきである。【委員】

(事務局)

原則は、下流で受け皿を確保したのち、上流狭窄部の開削し上流の治水安全度を上げていく手順である。ただし、下流の整備がすべて完了して初めて上流に手をつけるのではなく、上流の流下能力を30年の中で段階的に向上させることを考えている。

- 県管理区間の中抜け区間（新潟と長野県境）の整備計画策定との整合性を図る必要があるので早期整備計画策定と同区間の直轄事業化を要望する。【委員】
- 信濃川下流の安全度向上では、中ノ口川も国と一体的な整備が必要ではないか。【委員】

(超過洪水対策について)

- 平成23年7月豪雨では、長い区間で計画高水位を越える洪水を受け越水の恐れもあった。超過洪水対策としてソフト対策の他にハード対策による多重防御が必要ではないか。【委員】
- 平成23年7月豪雨では五十嵐川や刈谷田川流域で100分の1以上の生起確率の洪水が起きた。これを踏まえ、整備目標案については豪雨の戦後最大規模を生起確率で評価するというよりも、戦後から整備計画終了時点までの100年間に生じるリスクについて考えることが重要ではないか。【委員】

(事務局)

実際に発生した最大級の災害に対処するという表現はあると考える。ただし、整備目標が生起確率だけにとらわれずに、治水安全度の上中下流バランスを崩さないような整備メニューについて一般の方にも分かりやすいように検討したい。

- 平成23年7月豪雨規模の降雨が新潟県と長野県で同時に起きた場合の極端現象の検討も必要ではないか。【委員】

(河川文化、防災教育等について)

- 新潟は信濃川と共に発展し、川が育んだ文化もある。整備計画に河川文化を大切し、理解を図るようなキーワードが記載できないか。【委員】
- 東日本大震災では、小学校の避難が迅速に行動できなかつたという報道もあり、近年、

県下においても歴史的な災害に対する正しい認識や防災の知識の伝承がなされていないと感じる。川の文化や水害の歴史を伝承するうえでは、大河津資料館など重要な役割を担うことから、これらの活用についてもこの機会に方向性を打ち出すべきではないか。【委員】

- 減災対策の一環として防災教育はとても重要であり、先人の知恵や文化を伝承する防災教育の記述も必要である。【委員】

#### ■河川の適正な利用又は流水の正常な機能の維持に関する目標について

- 維持流量では、ダムから一定量を放流することが多いが、その川の固有の特徴をつくっている要因に河川の攪乱（川のリズム）がある。より自然に近い流れとなるよう操作が必要ではないか。【委員】

#### ■河川環境の整備と保全に関する目標について

- 信濃川下流域では、「潟」の水環境（「ガタ」の歴史的、文化的風土）が重要である。鳥屋野潟を含めた水環境の保全についても触れるべきではないか。【委員】
- 河川環境を守るということでは、行政と地域住民が一体となっていくことが重要と考える。目標のなかに、地域住民とともに守っていくという記載ができないか。【委員】
- 礫河原の再生や湿地再生の取り組みでは、長期的な視点に立った水系全体の土砂の連続性や時間的な変化を把握することが大切である。また、計画高水位以下の河道の形状の経年変化を把握することは、洪水時の土砂の動きを知るとともに維持管理に活用することもからも重要である。【委員】

（事務局）

自然再生については、不確定要素を含みながら実施しているところであり、頂いたご意見を整理して進めていく。

以上